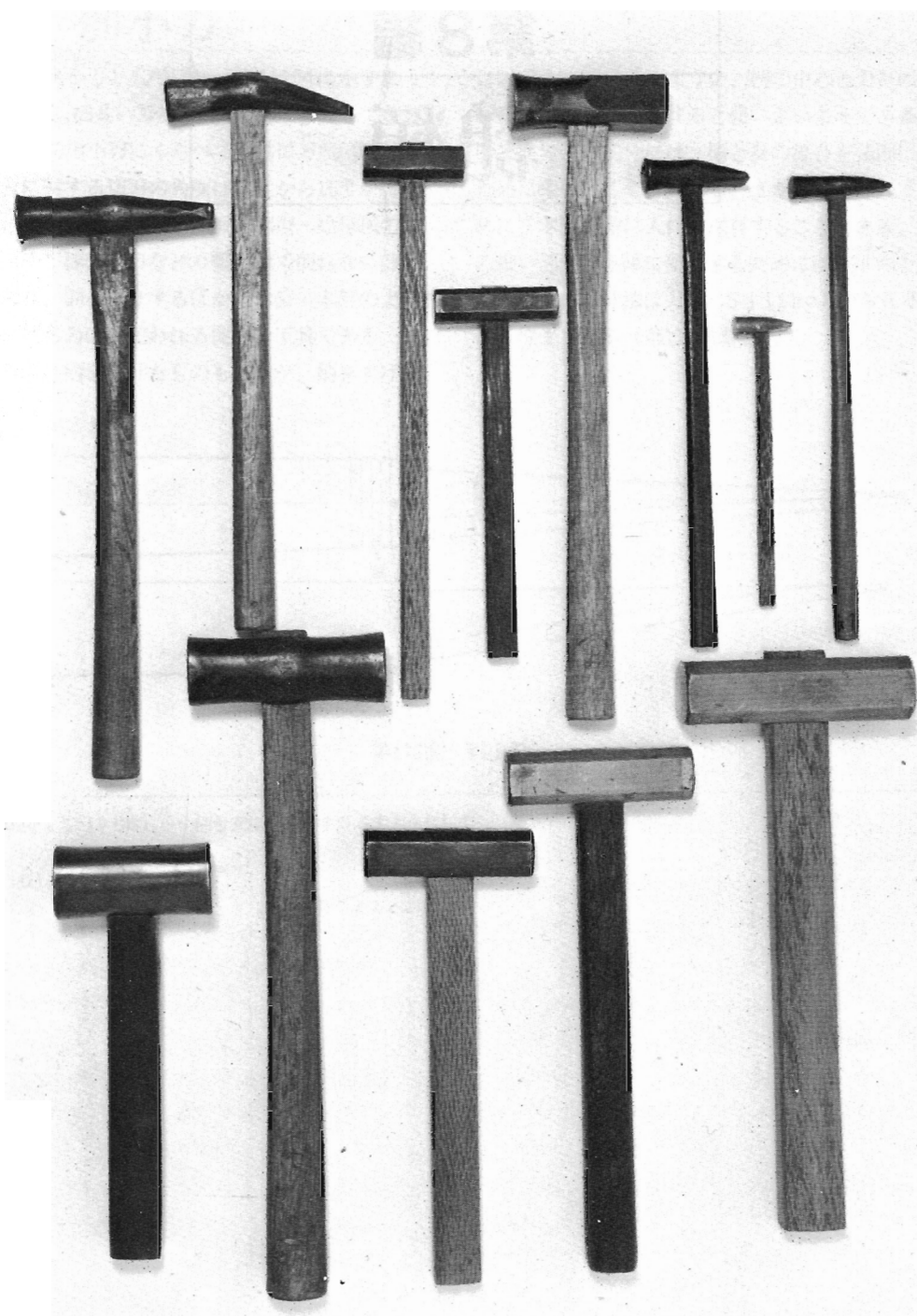
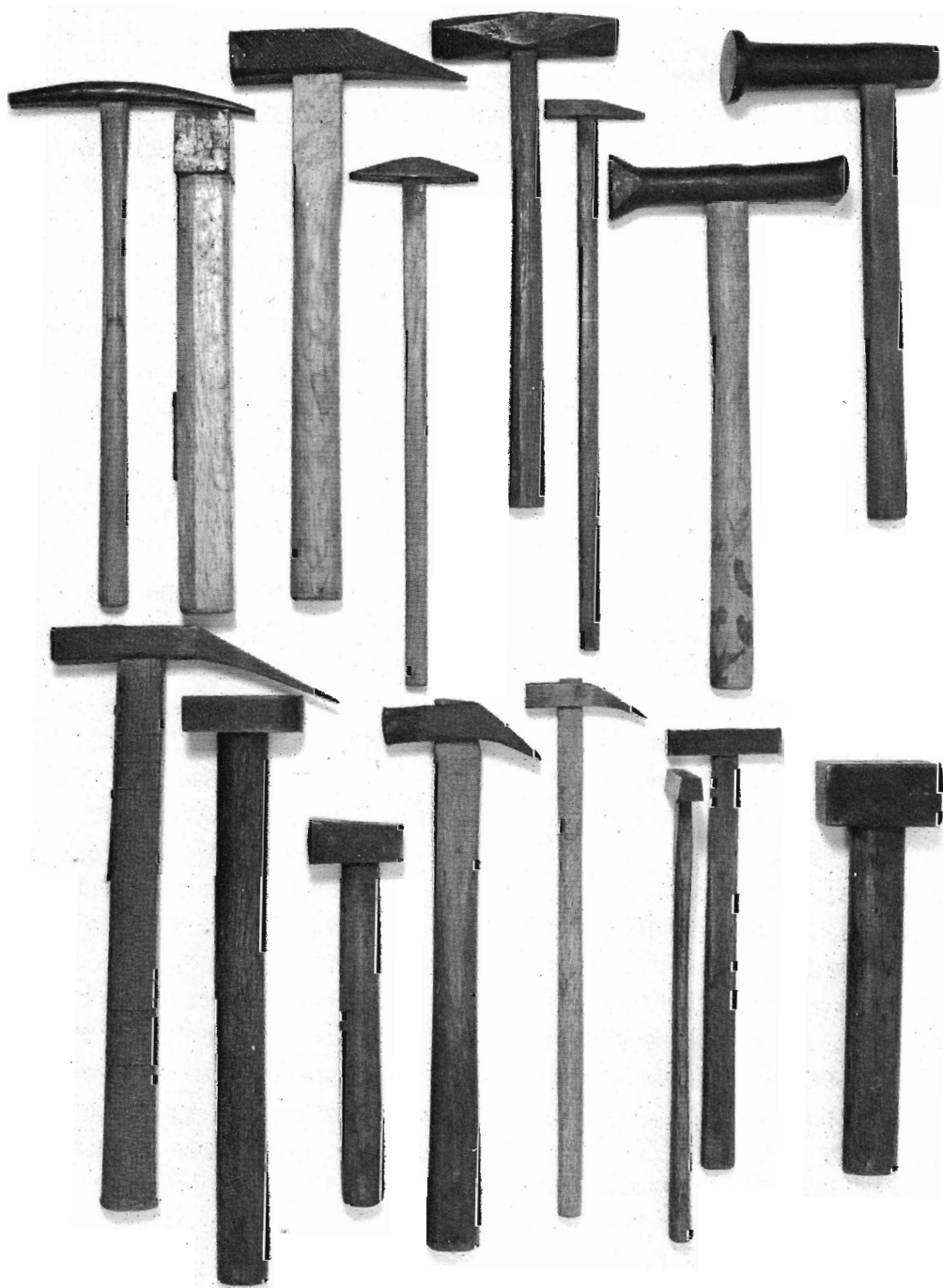


第8編

槌類



▲だいくようげんのう（大工用玄能）。左上の2丁は関西型の玄能、上右の3丁は、からかみかなづち（唐紙金槌）。



▲各種金槌。左上から、椅子張り用、とんとん葺(屋根屋)、ラス下地、目立用両刃、鋸鋸治、タイル、ブリキ用2種。2段め左から、瓦職、桧皮葺、桐簀笥(折屋)、箱屋、箱屋、ガラス、畳。

## 第79章 玄能

### 1 玄能の種類と用途

玄能は源翁または玄翁などの文字も使い、第113図イに示すような形の槌の一種である。両方とも扁平な鉄製の頭と、樫材のような丈夫な木製の柄とからできている。おもに鑿や鉋、その他の工具をたたいたり、釘類を打ち込むのに使われ、大工・建具職・家具指物その他すべての木工用にはなくてはならない工具の一つである。

玄能には用途によって、特大または大玄能・中玄能・小玄能・豆玄能などの区別がある。頭の形は第113図の口の各図に示すように、頭の側面の形には握形と直線形の二種類がある。握形の頭の断面は楕円形が普通である。直線形には、円形・八角形・一字形・方形・方形面取などの断面のものがある。握形は図にあるように、頭の側面が曲線状をしている。大玄能・中玄能は握形のもが普通である。玄能の頭の小口、すなわち打ちたくのに使う面には普通、鋼を使う。大玄能と豆玄能の小口は両端ともに真っ平らである。中玄能と小玄能は一端が真っ平らで、他の一端はやや中高である。この中高の面を木殺面といって、木材の表面をたたき縮める(殺す)のに使用する。鑿の柄頭をたたいたり、釘の頭をたたくには真っ平らな方を使う。

これらの各種の玄能の中では、中玄能がもっとも多く使われる。建具・家具指物その他の小細工用には、おもに中玄能を使う。そのため中玄能は鑿の柄頭や冠をいためないように、とくに小口の径をいくらか太くしてある。大玄能は、建築などで力のいる大きな鑿孔を掘るのに使う。豆玄能は、おもに鉄打・天井張などに使われる。

### 2 玄能の柄の付け方

玄能はつねに激しく打撃するのに使うから、柄はとくに丈夫でなければならない。また、柄の適不適

は使用上の便不便に大きく影響する。だから柄の付け方には、十分注意をしなければならない。柄のすげ方が不完全であると、使用中に頭が脱落して飛び、他人に不慮のけがをさせてしまうことがある。

玄能の柄には樫の良材がもっとも適当である。柄のすげ方は、まず玄能の頭の方になるほうの孔の口元を鑿を使って二図のように広げる。これにあらかじめ作っておいた柄の先端に鋸目を二つ入れ、甲平の面をたたいて木殺しをしてから、玄能の頭にはめる。そして先方からあらかじめ挽き込んだ挽目に2本の楔を打ち込む。こうすれば柄の先端はハ図のように銀杏葉形に開いて、強く柄をたたいても頭が脱落しない。楔の余分な部分は切り取る。

柄は使用に便利なように少し湾曲させる。

### 3 玄能の使用法

玄能は普通、柄の中央部から手前の方を握って使用する。強くたく必要のある場合は、柄の末端をつかんで遠心力を大きくして使う。反対に力をあまり加える必要のないときは、頭に近い方を握って使用する。場合によっては、頭を直接握って頭だけで軽くたくこともある。また鑿柄をたく場合は、ホ図のように、柄頭の中心を玄能の中心で正しくたたいて使用することが大切である。そのほか建具・家具などの組立にも、材料の大きさに応じて大中小各種の玄能を使い分けるが、この場合、直接玄能を使うと材料の表面に傷が残るから必ず打当てと呼ばれる短冊形の当木を使い、その上からたくことが重要である。

玄能の大きさは、普通重さで定める。特大玄能は250~300匁(940~1,125gm)位、大玄能は180~200匁(650~750gm)位、中玄能は100~140匁(400~500g)位、小玄能では60~70匁(250g)位が普通である。

## 第80章 金槌

金槌でもっとも普通に使われるものは、第113図リに示すようなものである。一方が尖った方形の断

面を持つ頭に柄を付けてあって、おもに釘や鉄の類または鑿などを打ち込むのに使い、俗に目釘打など

とも呼ばれる。頭の四角形のこくろ小口は付鋼つけがわをしてある。面は真っ平らで打つのに使う。他端は先がとがり、手錐てすいの代用として釘・鋸などの孔をあけるのに使う。この種の金槌は、建築・建具・家具指物・小細工などに使われる。また釘を多く使う製箱・荷造・芝居の道具方などにも使われ、家庭用としても広く使われている。

金槌には用途によって、大きさや形の違った各種のものがある。たとえば、しよん四分一金槌・はづり刃槌・りよほ両刃槌・からかみ唐紙金槌・はこ箱屋金槌・おひや折屋金槌・やね屋根屋金槌・がらす硝子屋金槌・いす椅子屋金槌・かざり錫屋金槌・ふくろ袋物屋金槌・たいるタイル屋金槌・ゐら瓦屋金槌・れんが煉瓦屋金槌などがある。

しよん四分一金槌は又図に示すような小型の金槌で、円形と角形の断面のものがある。こまかい釘や鋸を打つのに適している。

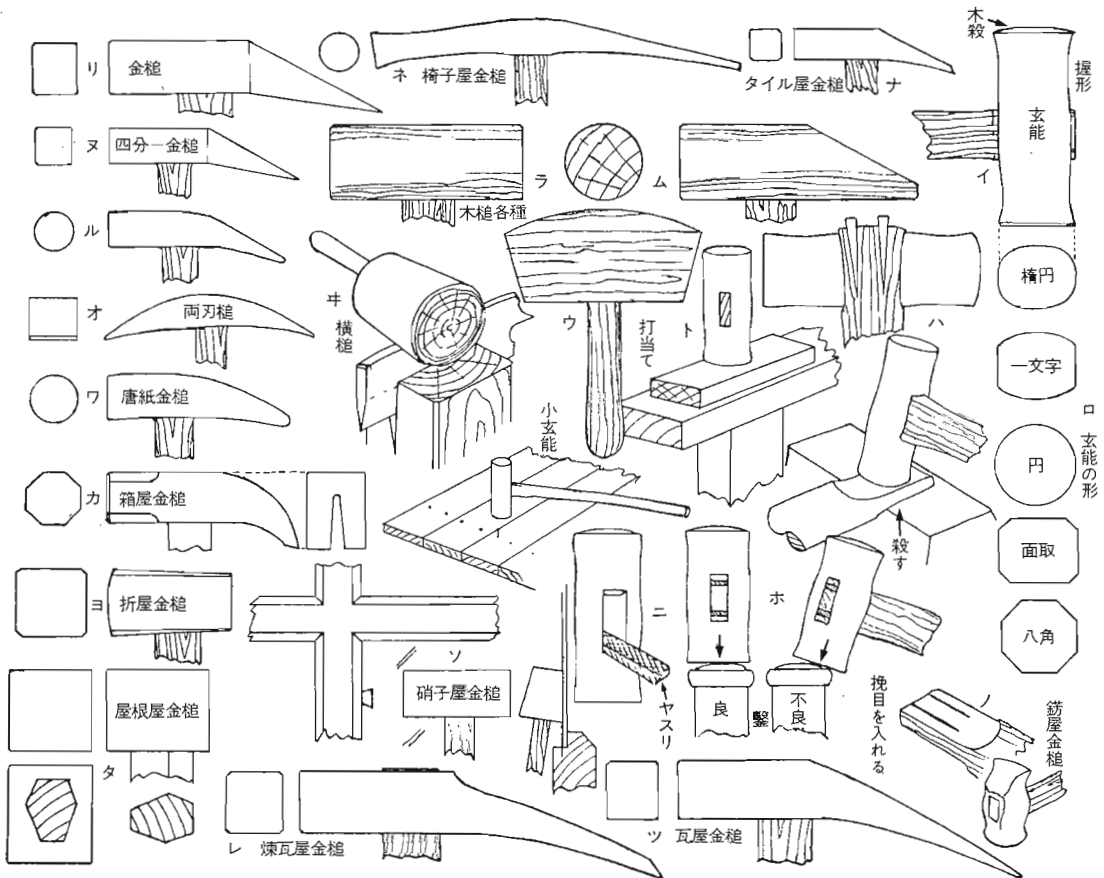
はづり刃槌・りよほ両刃槌は、オ図のように一端または両端が扁平にとがった刃形をしている。鋸の刃歯振用として多く使われる（54頁第29図参照）。

からかみ唐紙金槌はワ図のような金槌で、経師屋が多く使うので、この名称がある。

はこ箱屋金槌はカ図のような金槌で、頭・柄ともに鉄製でできている。頭の一方はこくろ鷲口状に曲げ、先端に割込を入れて釘抜にしてある。柄はこひら甲平の鉄棒で末端をへら形にし、割込を入れてある。荷箱製造・荷造・荷開などに使われるほか、一般家庭用として使われている。

おひや折屋金槌はヨ図のような金槌で、普通の金槌と少し違う。柄が短い。頭の一端が大きくて、小口は中高で木殺になっており、他端はやや小口が小さい。木釘や竹釘などを打つのに使う。折箱・たんす・

第113図 金槌の種類と用途



桐箱・抽斗・その他木具の製作に使われる。

屋根屋金槌は夕図のように、ほとんど四角形をした金槌である。三面に付鋼をして一面を鍛鉄にして、四面とも打ちたたくの<sup>\*</sup>に利用する。竹釘・木釘は鍛鉄の面でたたき、鋼の面では金釘をたたく。柄の下面には鉄板を取り付けてあって、それで釘を押し込む。また柄に目盛りをつけてあって、<sup>はし</sup>葺足<sup>あし</sup>を測るのに使う。檜皮葺屋根屋が使う。

硝子屋金槌は、ソ図のような金槌で、梯形断面の頭を図のように使って、窓ガラスなどの平爪を打つ

のに使用する。

鋳屋金槌はノ図に示すような小型の金槌である。おもに鋳職が小型の鑿<sup>たがひ</sup>をたたくの<sup>\*</sup>に使い、とがった方で鋳の頭をカシメル。

そのほか瓦屋・煉瓦屋・タイル屋金槌はツ、レ、ナ図に示すもので、頭の一端が鑿状に鋭利にとがっている。瓦・煉瓦・タイルなどに孔をあけるのに使う。袋物屋金槌はきわめて小型の金槌で、がまぐちや煙草入などの金具を加工するのに使う。

## 第81章 木槌

木槌は材槌ともいい、頭・柄ともに木製である。材料にはおもに樫材を使う。形には第113図のラム図のようなもののほか、八角形の断面のものもある。用途は、玄能のような金属製のものではたたかない方がよい場合に使用する。たとえば鑿孔掘・彫刻、または鉋刃の抜き挿し・桶屋・ブリキ屋などで使われる。

大きさは、用途によって大小の各種がある。頭の小口の径が1.8～2寸（6cm）位、長さは3.5～4寸

（12cm）位、柄孔は5分に7分位、柄の長さは8寸～1尺（24～30cm）位が普通である。

または木槌の中には、ウ図に示すような小口が方形で側面が扇形のものもある。これはおもに鑿をたたくの<sup>\*</sup>に使う。洋風の木槌は、一般にこの形のものが多い。キ図のような横槌も、鉋などを使って木を割るのに使う。この槌は樫、またはヒイラギなどで作る。

木具（P158）……箱膳などの木地